

はじめに

本 Z I N E に収められたエッセイは「日経新聞」のpromナードという欄に、二〇二五年一月から六月まで掲載されたものです。日経promナードは「日経新聞」の夕刊の連載で、さまざまな著者が執筆しています。私は、毎週金曜日に連載しました。

お話をいただいたときに《書きたいことリスト》を作りました。それに従って書いたものもありますが、リストになくても執筆時に「これを書きたい！」と思って書いたこともあります。最初に作った《書きたいことリスト》には載せたけれども書けなかったこともあります。

毎週毎週、心の赴くまま書いていったので、そこには統一したテーマはありませんし、順序もバラバラです。Z I N E にするときにはテーマごとに分類しようとも思いましたが、このバラバラ感が私のとつ散らかった頭の中を再現するようで面白かったので、そのままにしました。エッセイの中でも書きましたが、私は色々なことをしたい「三流」であり、かつそれを思いつくままに行っていく「雑」なのです。

本 Z I N E 掲載のエッセイは、ひとつのテーマが一冊の本になるくらいに圧縮されています。

どうぞ、お気の向くままバラバラとお読みいただき、ご自身の脳内で解凍し、さらにそれについていろいろとお考えいただければ幸いです。

あ、これらのエッセイは連載が終わった時点で著作権が私に移りました。言っちゃえば「著作権フリー」です。引用、再掲、どうぞご自由にお使いください。

安田登

新たな自分と出会う春

新年になると必ず思い出す和歌がある。『万葉集』の歌人、大伴家持の歌だ。

あたら
新しき年の始の初春の 今日降る雪のいや重け吉事

「新しい年のはじめの、新春の今日を降りしきる雪のように、いつそう重なれ、吉き事よ（中西進）」

これからはじまる一年を予祝する、なんともめでたい和歌である。

上の句を見ると「新」、「始」、「初春」と同じような意味のことが続く。たった三十一文字しか使えない和歌なのに、これほどの同義語の繰り返しは、やや型破りだ。

とはいえ、同じような意味のことばが、これでもか、これでもかと繰り返しされると「本当に新しいときが来たんだ」という気持ちになる。

めでたい。むろん家持はわざとやっている。

この中でも、初春の「初」は私たち能楽師には親しい語だ。

この「初」が含まれる「初心忘るべからず」は、能楽を大成した観阿弥、世阿弥父子が初めて使った言葉だ。ふたりにこの語をさまざまな文脈で使う。が、その都度意味が微妙に違うので、ここでは「初」という漢字について見てみたい。

「初」の左にある偏は、衣へんで「衣」を意味する。右は「刀」。衣を作るときには、反物にハサミ（刀）を入れて裁



断する。その最初の一刀が「初」であると、最古の辞書『説文解字』にある。

反物にハサミを入れなければ衣を作ることではできない。その反物がどんなに美しく、またどれほど高価であろうともハサミを入れて裁断する。

人間も同じだ。変化し、成長するためには、過去の自分にハサミ（刀）を入れなければならない。栄光の過去をバツサリと斬り捨てよという教え、それが「初心」だ。

私たちの身体の細胞は死と再生とを繰り返している。私たち自身は刻々と変化をしているのだ。しかし、「自分はこんな人間だ」と考えている「自己イメージ」はほとんど変化しない。変化し続ける「自己」と、変化しない「自己イメージ」。この両者が乖離かいりしていくと、無理無理が起きる。

毎日がつまらなく、息苦しいものになる。好奇心ももうすれ、成長も止まってしまふ。人生も、その人間もつまらないものになっていく。そんなときに必要なのが「初心」なのである。

古い「自己イメージ」をバツサリ裁ち切り、次なるステージに上り、そして新しい身の丈に合った「自己」に立ち返る、世阿弥せあやはこれを「時々じじの初心しよん」とも呼んだ。人生にはさまざまな時々、すなわちステージがある。一度「初心」しても、次のステージの初心が俟まちつ。初心は一度では終わらない。人の一生は初心の連続なのである。

とはいえ、初心はこわいし、面倒だ。

だからこそ新たな年、新年がある。「あらた」の語源は「ある（生る）」である。「生る」とは神霊の誕生をいう。『古事記』や『万葉集』では「生あれます」ものは神霊や神霊の意志である。「新年」とは新たな歳神としがみの生まれるときであり、また自分の中の神性が新たに生まれ出るときである。

新たな神性、新たな自己の生まれくる新年は「初心」に最適な時である。

特に今年ことしは脱皮だつひの蛇へびの歳とし。明日あしたからなどと**言わずに**、今日けふからぜひ「初心」を！

稽古は熟達を目指す

日本には世界に誇る学習システムがある。「稽古」だ。

学びには二種類ある。ひとつは現実の社会に自己を最適化していく実用的な学び。職場内訓練（OJT）や資格試験などの学びはこちらに属する。ゴルフや英会話などのレッスンなどもこちらだ。

それに対して根本を固めていく本質の学びもある。それは稽古を通して学ばれる。

江戸時代、將軍や大名たちは能の謡や舞を稽古した。彼らが学んだのは技術ではない。「お上手ですね」と言われなくて学んだでもない。そういうことは二の次だ。それはレッスンでも学べる。稽古はレッスンとは違う。

稽古は「古」を学ぶ。「古」とは不変の真理をいう。

中国古代学者の加藤常賢氏は、「古」という文字は兜の形の象形だという。兜は固い。だから、古を口で囲めば「固」になる。そして、固いものは不変であり、過去も不変であるから古いという意味になる。が、あくまでもその原義は「不変」である。

また、稽古の「稽」は、西周の青銅器の銘文（金文）にも現れる「拝稽首」という拝礼だ。拝稽首とは、地に頭を付ける礼をいう。

すなわち稽古とは、「古（固）」に不変なものに対して地に頭をつけるほどの拝礼をすることをいう。

稽古の場では師匠に対して頭を下げるが、それは人間としての師匠に頭を下げるだけではない。師匠が背負っている綿々と続く不変の真理に対して頭を下げているのである。



加藤常賢氏は、「稽古」の典故である『尚書』では、「稽」は神霊と接続する行為であるという。不変の深奥に流れる、神霊的なものと接続をする行為が稽古であり、「役に立つ」とか「効率性」とかを重視するレッスンは根本的に異なる。だから稽古では上手くなるなどということはそれほど重視しない。「ただ稽古をする」ことが大切なのである。

能の謡や仕舞の稽古、あるいは茶道や華道、日本舞踊、書道などの稽古を始めると、師匠の理不尽さに最初は腹が立つことも多い。

まず、ほとんど誉めない。誉めないどころか「それでいい」とも言わない。毎回、否定の連続だ。が、これには理由がある。それは師匠も常に進歩を続ける修行者だからである。

今の自分が「いい」と思っても十年後の自分がそう思うかはわからない。「いい」と言った瞬間に師匠の成長は止まる。だから「いい」とも言えないし、誉めもしないのだ。

また、稽古ではメモや録音を許されないことも多い。次の稽古に行くと、前回教えてもらったことの大半を忘れていく。師匠から叱られる。だが、それでいい。稽古の中に最初から「忘却」が組み込まれているからだ。忘却したものは自分の中のリソースで埋める。最初の頃はリソースなんてほとんどない。だから何もできずに立ち往生する。が、リソースが蓄積されれば、師匠のマネではない自分なりの芸が現れる。それを待つ。

だから日本の稽古は「上達」ではなく「熟達」をを目指すようになる。

垂直方向の上達には限界がある。体力も衰え、記憶力も衰退し、死が間近に迫れば、おのれの未完に絶望する。だが、水平方向の熟達に限界はない。死が間近に迫っても終わらない。

だから世阿弥はいう。「命には終わりあり。能には果てあるべからず」と。

純素人のすすめ

私が子どもの頃は、男の子はプロ野球選手になることに憧れた。いまはサッカー選手らしい。どちらにしろ、みなプロに憧れる。が、七十歳も近くになった今、私は素人、それも純素人に憧れる。

世間では素人は軽く見られがちである。しかし、素人とは下手な人や未熟な人のことをいう言葉ではない。素人はアマチュアとは違うのだ。

素人の反対は玄人。「素」と「玄」の漢字に共通するものは「玄（糸）」である。

いろいろな色を重ねて作る黒、それが「玄」だ。たとえば能の玄人は、多くの演目を稽古して、それらを覚える。百ほどの演目はすぐにできなければならない。さまざまな演目を身につけている人、それが玄人だ。

それに対して素人の「素」は、混じり気のない純白の糸を言う。能を稽古する素人は、多くの演目を知っている必要はない。稽古した演目を「素」、すなわち純粋無垢な心で謡い舞う。

むろん、純粋無垢な大人などいない。そのままではできない。だから稽古によって「素」を究めていく必要がある。「俺は子どもの頃から汚れているからダメだよ」という人がいるが、そんなことはない。人はみな、無垢な性質を持って生まれて来る。これを素の質、「素質」という。「あの子は素質がある」なんていうが、すべての人は素質を持って生まれて来る。素質とは、文字通り白糸のような性質をいうのだ。

素質はピュアだ。そして世間は汚れている。傷つきやすい素質を、世間の汚濁から守るために私たちは無意識のうち素質の上に防御膜を張る。それは必要なものではあるが、雑物でもある。唐代の詩人、杜甫は「己に悲しむ素質の時に随いて染めらるるを」と詠い、真つ白な素質の若者が時代に染められていくことを悲しんだ（『白絲行』）。

時代に染められた雑物を排し、純粹無垢な「素」に近づくことが素人の稽古だ。これは演者だけの話ではない。鑑賞者にもいえる。

私たちは芸術や芸能を鑑賞し出すと、いろいろ言いたくなる。知識も増え、目も肥えると、鑑賞の玄人、見巧者みこうしゃになる。が、これは要注意だ。

小説家で、能の教授の免許も持っていた夢野久作は、そのような見巧者を嫌った。高慢顔で能に接する当時の文士や批評家に対して「真偽のわからない掛物に対する鑑定家みたいに、いい加減な否定や、肯定ばかりしている」と辛辣きんせつである。

それよりも江戸川乱歩らのような、能をほとんど見ない、そして当時は下に見られていた探偵小説家たちの能に対する態度を評価する。

「純素人として、全霊を裸体にして能と四ツに取組んで、能の真実の力に打ちひしがれて満足し得る」のは差別待遇を受けている探偵小説家しかいないというのである。

能だけの話ではない。あらゆる芸術がそうだ。人もそうだし、仕事もそうだ。人生で出会うすべてのものに真っ白な純素人として向き合ってみる。歩き慣れた道を初めて歩く道のように歩く。親しい人にも初めて会った人のように出会う。聴きなれた音楽も初めて聴いた曲のように聴く。

それも全身全霊、裸体となって向き合う。

むろん簡単ではない。が、「純素人として向き合おう」と決めるだけで子どもの頃のワクワクしていた世界が戻ってくる。いくつになっても世界は輝く。



三流のすすめ

今回は「三流のすすめ」である。ここでいう三流とは、いろいろなことをする人という意味だ。

出典は魏の曹叡の時代に書かれた『人物志』である。

曹叡は『三国志』で有名な曹操の孫だ。三代目はいつでも大変だ。祖父の曹操はいわば創業者。彼自身の實力はむしろのこと、彼の周りには創業を助けた有能な大臣たちがたくさんいた。大臣にも子はいる、孫もいる。曹操の孫の曹叡が王になったとき、魏の国の大臣の多くは世襲の者ばかりになっていた。

「このままでは国が腐る」

そう思った曹叡は、世襲の大臣を全員クビにして、新たな大臣を登用しようとした。その命を承けたのが『人物志』を書いた劉劭である。

全員クビはさすがにやりすぎということで、実際はもう少し穏健なものにはなった。しかし、そのミツシヨンのもとで書かれた本書には、国家を任せ得るのはどのような人か、その鑑定の方法、評価の方法、そして適材適所に人を配する方法などが書かれる。

現代でも組織の長たる人、企業経営や政治の中核にいる人などには役に立つ本だ。

この『人物志』には「一流の人に国を任せてはいけない」と書く。

一流とは「ひとつのことの専門家」をいう。そういう人に国を任せると、その専門から外れた者を「悪」だと思ってしまう。たとえば法律の専門家に任せると、法を守らない人を「悪」だと見なす。

胸に手を当てて考えてみて欲しい。今まで一度も法律を破ったことのない人はどのくらいいるだろうか。高速道路

は法定速度で走っているか。知らないうちにゴミをポイ捨てしていないか。法律の専門家はそんなこともすべて「悪」であるとし、排斥する。

国家の経営はそんな単純なものではない。

では、二流、ふたつのことの専門家はどうか。それでもまだダメだ。

劉劭は、国を任せることができるのはいくつもの専門を持つ「諸流」、すなわち三流以上の人だというのだ。

むろん、三流の人は専門分野においては一流には叶わない。しかし、国家全体を見渡す目を持つには三流の目が必要なのである。国家を任せる云々はともかく、三流はなかなかすごいのだ。

人には一生かけてひとつのことを究めようとする人がいる。そういう人が一流になる。むろん、それは素晴らしい。それに対してすぐに目移りしたり、飽きてしまったりして、あれもこれもと手を出してしまう人がいる。試験勉強をはじめると別の本を読みたくなったりね。三流予備軍だ。

ひとには両方いるはずなのに、なぜか世間は後者に冷たい。子どもの頃から「ほんと、お前は飽きっぽいんだから」と言われ続ける。「そんなんじや何も成しとげられないよ」とも言われる。大成なんてとんでもない。

世間が求めているのは、わき目もふらずにひとつのことにまい進する一流のオペレーターなのだ。

一流の人は賞賛され、おだてられ、しかし、ある日ポイッと捨てられる。一流の人は生贄の牛のようだ。

古代中国の思想家、莊子は「美しい衣で飾られた生贄の牛になるよりは、汚濁の中で遊び戯れる小さな豚になりたい」と言った。大賛成だ。

三流には三流の生き方がある。飽きっぽい結構。三流で行こうじゃないか。

ワキとして生きる

私が能楽師でもワキ方に属するということを前に書いた。ワキという語は「分き」を語源とする。「分き」とは分けること、区別、境をいう。

シテの役である幽霊や神霊の住むあの世である彼岸と、人間の住むこの世との境界（分き）の住民がワキだ。そして、不可視の幽霊の姿を観客に見せる（分からせる）。

幽霊がこの世に再び現れるのは、この世に「残」した「念」い、すなわち深い「残念」があるからだ。ワキはシテの残念に耳を傾け、その未完の念いの昇華を助ける。

が、深い悩みを体験したことのある人ならばわかると思うが、そんな時に「何を悩んでいるのか」と聞かれても答えられない。さまざまな念が絡まり合って、身動きすらもできないし、原因も理由もわからない、それが「悩み」だ。葛藤のように絡まったそんな念を、快刀乱麻を断つがごとくに「分ける」のもワキの役割だ。

それをワキは「問い」を発することによって行う。人工知能（AI）は自律的な問いができないという。問いとは人ならではの行為なのだ。

さまざまな問いを発したワキは、シテが語り始めるのを待つ。語り始めたら、あとは何もしない。相槌すら打たずに聞く。ただひたすら聞く。「何もしない」ということを全身全霊を込めて行うのだ。

それによって残念は昇華し、シテは成仏・往生をする。

ワキの機能とはすなわち、他者と接続し、その思いを整理・分析し、そしてそれを見せることである。熟練のカウンセラーのようでもある。



しかし、生者であるワキが、なぜあの世と接続し得るのだろうか。それはワキが、半分あの世に足を突っ込んでい
る人だからだ。

『敦盛』という能がある。

源氏の武将である熊谷直実は、平家の武将、平敦盛と戦い、首を掻こうと兜を取った。その時、敵は我が子と同じ
年齢の少年であることを知った。本当は殺したくはない。が、戦場である。

敦盛の首を切った彼は変わった。出世街道まっしぐらな熊谷であった。しかも、戦勝軍である源氏の武将だ。それ
からの栄達も約束されていたであろう。が、彼は人生を空虚なものと感じ、世を捨てた。

ワキとは、熊谷のように人生を半分捨てた人なのだ。空虚な人、それがワキだ。

そんなワキだからこそ、シテの死者の世界にも接続し得るし、その思いを整理・分析し、それを他者にも伝えるこ
とができるのだ。

私事をちよつと失礼。『100分de名著』という番組がある（Eテレ）。伊集院光さんと安部みちこアナウンサーと
ともに、その分野の専門家が講師として登場し、難解な名著を四週かけて読み解くという番組だ。私は今までに『平
家物語』、『太平記』、そして『ウェイリー版・源氏物語』に講師として出演した。

能楽師である。どの作品の専門家でもない。なのに、なぜ私が講師として三つの作品に呼ばれたのか。それは私が
ワキであるからだと思う。

難解な名著がシテだ。ワキとして、その名著に接続し、そしてそれを整理・分析し、それを視聴者に「分かりやす
く」伝える。

このワキの役割は多くの分野で求められているだろう。熊谷のようにいろいろあって「メインストリームからは
外れちゃったな」という時こそ、ワキとして生きるチャンスだ。